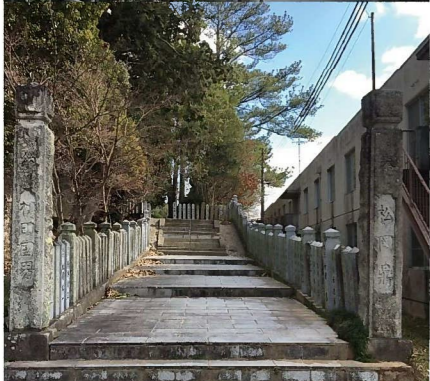




柳田國男生家



柳田國男・松岡鼎奉納玉垣 (鈴ノ森神社)



書：倉本樸山、画：藤本煙津



三木家旧蔵書の一部



学問・芸術文化のふるさと

近世になり庶民にも学問・芸術文化が普及するなかで、大庄屋三木家の好学の風や東西・南北の街道を行き交う人・物・情報、そして近代の郡の中心地としての繁栄は、学問・芸術文化をめざましい発展へと導きました。また一方では、美しい自然やそれらを彩る説話・伝承は、詩歌や絵画、研究などの題材となり、学問・芸術文化の発展を支えました。そして、柳田國男をはじめ、多くの学者や文化人を輩出してきました。

町内には偉人ゆかりの歴史文化遺産や、先人たちによる活発な学問・芸術文化活動を物語る数多くの歴史文化遺産が伝わり、日々の暮らしのなかで、ふと目にすることができます。そして、偉人の顕彰を通じた人材育成や他地域との交流、公民館クラブの活動など、「学問・芸術文化のふるさと」の土壌を活かした取組が展開されています。

■大庄屋三木家・好学の風

江戸時代、三木家は姫路藩の大庄屋を務め、地域の発展に尽くすだけでなく、地域文化の中心的役割を果たしてきました。数代にわたる好学の当主が収集した四千冊余の蔵書は、三木家の学芸を培養する源となりました。また、文化サロンの主催などを通じた辻川村の松岡家や北野村の畢家などとの交流や、蔵書の貸し出しなど、地域の「知」の拠点となっていました。

特に江戸時代後期の当主3代、通庸・通明・通深は、京都・大坂・江戸で学問を修め、学芸に深い関心をもって活躍しており、各地の文人・学者との交流の記録も残っています。

■寺子屋・私塾

幕末から明治初期にかけて、神崎郡には寺子屋や私塾が多数開かれ、福崎町には、田原村西田原（松岡操）、八千種村八千種（佐治実義）、福崎村西治（水野日寅）、福崎村福崎新（森熊吉）の4か所の記録が残ります。このうち、西田原の私塾が松岡塾です。かつて柳田國男の祖母・松岡小鶴が開き、父・松岡操が再興したもので、ここで國男や、後に平民社の指導者・普通選挙運動の先覚者となる佐治実然も学んでいます。

■文化人の交流の輪

近代以降も、近世に育まれた好学の風は受け継がれ、辻川への郡役所の設置は文化人の交流の輪を広げる後押しとなりました。神東・神西郡長の倉本樸山は、職務のかたわら、郡書記を務めた藤本煙津、三木通済、松岡操などと文化的交流を深めました。この辻川を中心に形成された知識人グループは、明治以降の各分野に活躍する人材輩出の源となりました。

■福崎町ゆかりの偉人

| | |
|--------------------|--|
| やなぎたくにお 柳田 國男 | 明治8年(1875)～昭和37年(1962)。松岡家の六男。民俗学者・官僚。日本民俗学を開拓・確立。昭和26年文化勲章受章。福崎町名誉町民。 |
| まつおか かなえ 松岡 鼎 | 万延元年(1860)～昭和9年(1934)。松岡家の長男。昌文小学校(現田原小学校)校長の後、医師・千葉県布佐町長を務め、地方医療・行政に尽力。 |
| いのうえ みちやす 井上 通泰 | 慶応2年(1866)～昭和16年(1941)。松岡家の三男。眼科医・歌人・国文学者。著作には『萬葉集新考』、『播磨風土記新考』などがある。 |
| まつおか しずお 松岡 静雄 | 明治11年(1878)～昭和11年(1936)。松岡家の七男。海軍軍人として日清・日露戦争に従軍し大佐まで昇進。退役後、民族学者・言語学者。 |
| まつおか てるお 松岡 輝夫 | 明治14年(1881)～昭和13年(1938)。松岡家の八男。日本画家。雅号は「映丘」。有職故実の研究を行い、大和絵の復興に尽力。 |
| よしき まさお 吉識 雅夫 | 明治41年(1908)～平成5年(1993)。船舶工学者。本籍は大貫。大型タンカーの開発に携わる。昭和57年文化勲章受章。福崎町名誉町民。 |
| ふじもと えんしん 藤本 煙津 | 天保9年(1838)～大正15年(1926)。本名節二。日本画家・篆刻家。山水画を得意としたほか、漢詩・篆刻でも多くの作品を残す。 |
| きしがみ だいさく 岸上 大作 | 昭和14年(1939)～昭和35年(1960)。歌人。福崎高校時代から作歌を始め、21歳で亡くなるまで歌人として活躍。 |

※この他、三木家当主をはじめ、倉本樸山、佐治実然、大杉兵太郎、松岡源之助など、数多くの文人・歌人等があげられます。



■俳諧などの庶民文化

17世紀後半に松尾芭蕉によって完成された俳諧は、地方にも多くの俳諧宗匠を生み、彼らを中心に俳諧連中が形成されて、俳諧人口のすそ野を広げました。『印南野』(元禄9年(1696))、『俳諧五々の冬 春曙庵追善』(寛延3年(1750))、『蓬萊帖』(天明8年(1788))などには、福崎町の人々の名が見られます。

このような俳書への入句や同好の仲間との句会の開催などに加え、雑俳(雑多な形式と内容をもつ遊戯的な俳諧)ではありますが、神社に多くの俳額が奉納されており、俳諧が身近な文芸として、広い階層に親しまれていたことを伝えています。

また、俳諧の他にも近世以来、詩歌や絵画、華道、裁縫などのさまざまな庶民文化が盛んであったことが、今日に伝わる奉納絵馬や和歌額、各種師匠の墓碑などからうかがうことができます。

■三木家と松岡家

三木家と松岡家の交流は、5代通庸の時代から始まったとされています。通庸と松岡義輔(柳田國男の曾祖父・医者)は詩友で、6代通明は義輔のもとで手習いを学びました。柳田國男の祖母・松岡小鶴は、医術・儒学などに通じ、7代通深と親交がありました。こうした学問的交流を背景に、8代通済は國男を自宅へ預かり、莫大な蔵書を自由に読むことを許し、9代拙二と國男は竹馬の友として生涯にわたり親交を深めました。

■松岡五兄弟

鼎、通泰、國男、静雄、輝夫の五兄弟は、それぞれの道で大成し、後に「松岡五兄弟」と呼ばれます。その大成は、祖母や両親の教え、兄弟間での支え合いや交流、文化人との交流などによって支えられたものでした。

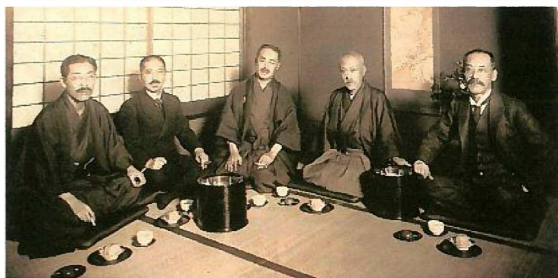
特に國男は、11歳の時、1年間三木家に預けられ、ここで歴代三木家当主が収集した大量の書物と出会い、この読書体験が、後年、日本民俗学を生む基礎となったことが、著書『故郷七十年』に記されています。13～15歳の2年間は、布川(茨城県利根町)の鼎に引き取られ、旧小川家の蔵書による知識と故郷辻川にないさまざまな経験は、後の民俗学研究につながるものとなりました。16歳で通泰に引き取られ、通泰を通じて森嶋外との知遇を得て、「秋元安民伝」を『めざまし草』(森嶋外主宰)に寄稿しています。19歳で第一高等中学校に進学しますが、その際には、鼎と通泰から学資などのさまざまな支援を受けています。

この他にも、兄弟間でのさまざまな交流があったことが、著書や葉書、書簡、写真などから知ることができます。

■関係する主な歴史文化遺産

| 項目 | 田原地区 | 八千種地区 | 福崎地区 |
|------------|--|---|---|
| 生家やゆかりの地 | ・柳田國男生家【県指定】 ・三木家住宅【県指定】 ・ヤマモモ(鈴ノ森神社)【町指定】 | ・圓覺寺：佐治実然出身寺 | ・観音寺：井上家菩提寺 |
| 顕彰碑・墓碑 | ・松岡小鶴・三子墓碑(悟真院墓地) ・三木家当主の墓碑(悟真院墓地) ・倉本樸山墓碑(悟真院墓地) ・藤本煙津墓碑(井ノ口墓地) ・俳諧師匠墓碑(薬師寺墓地) ・華道師匠墓碑(長目) ・大工・俳諧師匠墓碑(円乗寺北墓地) | ・寺子屋師匠墓碑(東大貫墓地) | ・井上通泰歌碑(観音寺) ・寺子屋師匠墓碑(蓮華寺墓地) ・裁縫師匠墓碑(蓮華寺墓地、金剛城寺) ・義太夫師匠墓碑(山崎千束) ・大工・俳諧師匠墓碑(新町墓地) |
| 文書・書画等 | ・三木家文書 ・雲津橋石標：藤本煙津書 ・恵美須神社戦役記念碑：藤本煙津書 ・歴史民俗資料館や柳田國男・松岡家記念館等の所蔵品 (松岡映丘画稿、藤本煙津書画など) | ・従軍記念碑：藤本煙津書(常住寺) | ・大杉兵太郎頌徳碑：藤本煙津書 ・児島卯蔵頌徳碑：藤本煙津書(新町墓地) ・田賀神社記念碑：藤本煙津書(田賀神社) |
| 絵馬・玉垣等の奉納品 | ・松岡鼎・柳田國男奉納玉垣(鈴ノ森神社) ・井上通泰奉納玉垣(田尻熊野神社) ・井上通泰奉納狛犬(三十八社) ・松岡源之助奉納十二支図・鶏(鈴ノ森神社) ・俳諧額(田尻熊野神社) | ・茶道図(南大貫大年神社) ・俳諧額(南大貫大年神社、日吉神社、余田大歳神社) ・発句集額(余田大歳神社) | ・松樹図：藤本煙津画(西治八幡神社) ・俳諧額(新町天満宮、二之宮神社、三宮神社、西谷大歳神社、廣田神社) ・和歌額(一之宮神社、西治八幡神社) ・浄瑠璃会額(新町天満宮) |

同家に裏手にいまでも残っている土蔵風の建物の二階八畳には、多くの蔵書があった。そして階下が隠居部屋で二階には誰も入れないことになっていたのだが、私は子供のことから、自由に蔵書のある所へ出入りして本を読むことができた。あまり静かなので、階下からおじいさんが心配して「寝てやしないか」と声を掛けることがあったほど、私はそれらの蔵書を耽読した。(中略)私の雑学風の基礎はこの一年ばかりの間に形造られたように思う。
(柳田國男『故郷七十年』(幼時の読書)、
『柳田國男全集』第21巻(1997.11、筑摩書房))



左から輝夫、静雄、國男、鼎、通泰(大正10年12月15日)

【主な成立時期】近世～近代